

無題

山城29回 上田 武司

他人に語れるようなたいそうな体験はありません。ただ山城で学んでよかった、と思えることを一つ。

三年生の秋でした。「山城祭で芝居やれへんか」。休憩時間、廊下ですれ違った木村正人君から声をかけられました。「何さんの？芝居なんかやったことないで」。確かそんなやり取りだったと思います。

三年間の部活（サッカー）を終え、遅まきながら受験に本腰を入れなければならぬのに、どうにも将来が描けず、誘われるままに仲間に加わりました。

顔合わせの会に出ると、岩見理君、原之薩順子さん、長島純江さんたちがいました。それぞれにクラスが違い、ほとんどつながりのない人たちにどうやって呼びかけたのか不思議でした（ほかに何人もいたし、手伝ってくれた友達もたくさんいたはずなのに記憶が定かではありません。間違いや遺漏はご容赦く

ださい）。芝居は当時、大きな社会問題だった同和問題を素材にしようというものでした。

それから約一カ月、放課後は稽古と議論に明け暮れました。場所は主に木村君の自宅で、毎晩のように食事の世話にもなりました。

今考えると、議論は気恥ずかしいほどにたなかつたと思います。それでも気持ちは一人前のつもりでした。

北野神社の境内で提灯の明かりを頼りに「舞台稽古」をしてたこともありました。校内でビラを配ったりもしました。さして親しくもなかった者同士が、目標に向かって努力するうち一つになる。楽しさが日々増していく、毎日でした。芝居を終えた時、何か胸のつかえが降りた感じがしました。

校則はさほど厳しくなく、私服でもあったので、校内には自由な雰囲気がありました。もともと、実態は少しルーズだったかもしれませんが。ただ全体にお仕着せに感じる部分が少なかったので、自分で考え、行動し、答えを見つける大切さを学んだ気がします（もちろん当時はそんなことは思いもありませんでしたが）。

部活で教えられたことも山ほどあるのですが、山城祭への参加は、自分で考え、行動し、答えを見つけることの大切さを体験したと思います。

あれから三〇年、お世話になった先生方、先輩、友人たちへのお礼の気持ちで歳を追うごとに募ってきます。

一〇〇年を迎え、現役のみなさんが実り多い高校生活を送られることを願うとともに、京三中・山城高同窓会がさらに発展を遂げるよう、微力ながら尽くしていきたいと思っています。